第１章

過去・現在から未来に向けて

１　まちづくりの系譜
２　千代田区の魅力･価値
３　まちづくりの成果
４　計画改定の視点と進化の方向性

1　まちづくりの系譜

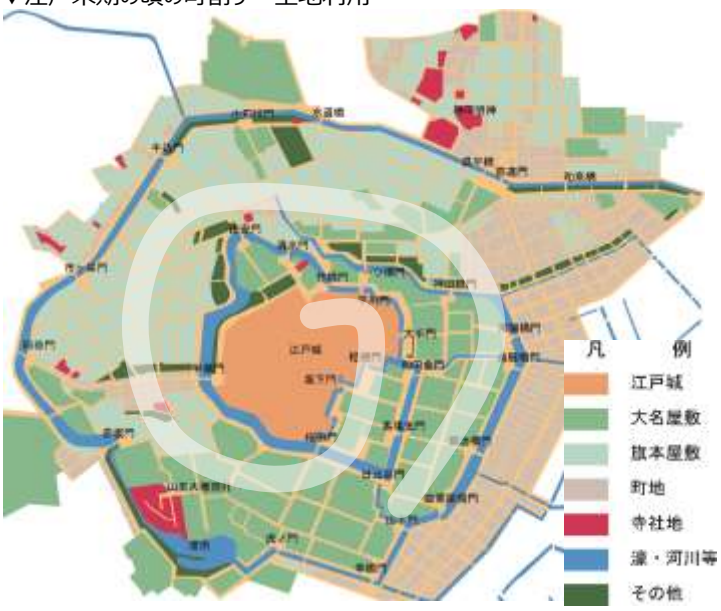
千代田区は、江戸城を中心に発展したまちがルーツ*です。江戸の町割り*や緑と水辺の骨格を基盤としながら明治期に帝都建設が進み、江戸の文化と近代都市の高度な機能、風格ある街並みが融合し、千代田区ならではの個性ある界隈*が各所で育まれてきました。大正～昭和にかけての震災・戦災からの二度の復興、高度経済成長期の国際化と東京への機能集中、平成初期の急激な業務地化と人口減少の時代、定住人口*の回復基調への転換を経て、現在では、大手町・丸の内・有楽町地域や秋葉原駅周辺などにおける機能更新や拠点形成などの都市再生が進展しています。

（1）江戸：千代田のルーツ

1590 年の徳川氏の江戸入城後、町割り*や町地の形成、日比谷入江の埋め立て、江戸開府以降の本格的な築城など、江戸城の総構えが完成するとともに、まちづくりが一体的に進展しました。

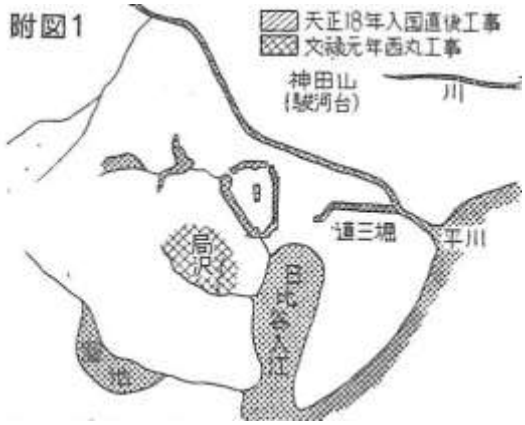
江戸城の拡張に伴い、「の」の字を書くように、大名藩邸、旗本屋敷、町地などのまちと濠が発展しました。江戸のまちは、地形の起伏（高低差）を巧みに利用しており、連続的な眺望*や緑と水辺の骨格、まちの歴史・記憶が刻まれた町割り*、坂道の風情などが現代まで継承されています。

▼江戸末期の頃の町割り*・土地利用



出典：千代田の土地利用

コラム　江戸のまちの始まりの“始まり”　～徳川氏入城の頃～



徳川氏の江戸入城の頃、築城のための材木・石材が相模の国から運び込まれ、鎌倉から来た材木商が取り仕切っていたことから鎌倉河岸近辺に多くの人が集まり、1596 年には既に酒屋が開業するなど、荷揚げや商いが盛んになりました。また、このころ開削された道三堀の沿岸では、従来の四日市町に加えて、舟町・材木町・柳町など、江戸先住者の町地が成立しています。（それ以外の町人は、江戸前島の道三堀から日本橋にかけての埋め立て地に移住。日本橋架橋は 1603 年ごろ。）

図：千代田区刊「千代田区史（上巻）」より転写
参考文献：千代田区ＨＰ（町名由来板）

コラム　そもそも千代田区は、江戸の頃から「多様性」「先進性」のあるまち

まちの発展に伴い、江戸にはたくさんのひとが集まり、いろいろな職業が営まれるようになることで、町地には、多種多様な職人が多く住み、商店も繁盛しました。千代田区の古い町名を見てみるとその多様性が表れています。

猿楽師	神田猿楽町	下駄師	下駄新道＝内神田三丁目
壁塗り師	白壁町＝鍛冶町二丁目	鍛冶師	鍛冶町二丁目・神田鍛冶町三丁目
塗師	塗師町＝鍛冶町一丁目	鍋売	鍋町＝鍛冶町二丁目・神田鍛冶町三丁目
包丁師	台所町＝外神田二丁目	大工	大工町＝内神田一丁目
紺掻	神田紺屋町	銀細工師	新銀町＝神田多町二丁目・神田司町二丁目
鷹匠	隼町	麹売り	麹町
研師	佐柄木町＝神田美土代町		

参考文献：目で見る千代田の歴史

▼染物屋（神田紺屋町）

（２）明治：帝都東京の建設と都市の近代化

明治に入ると、江戸の遺構と町割り*を引き継ぎ、市区改正事業*を起点として、帝都東京の建設が始まり、近代国家の首都として必要な社会基盤*の整備とともに、都市機能や人の集積が進みました。

▼一丁倫敦（いっちょうろんどん）と呼ばれた日本初のオフィス街（馬場先通り）

出典：千代田区美観地区ガイドプラン

（３）大正～昭和：震災・戦災からの二度の復興と高度経済成長

▼創建当時の東京駅（現在、当時の姿を復原）

出典：千代田区美観地区ガイドプラン

大正 3（1914）年に、東京の象徴となる東京駅が創建されるなど、首都東京の顔づくりや鉄道等の整備が進みました。関東大震災や東京大空襲で東京のまちは大きな被害を受けましたが、その度ごとの復興で現在のまちの街区構成が形づくられました。また、印刷出版など特徴ある生業の集積とともに千代田区の個性ある界隈*が生まれ、今も息づいています。

戦後、東京オリンピックに向けて、外濠の一部が埋め立てられ、首都高速道路の建設が進み、路面電車も徐々に姿を消しました。更に、高度経済成長とともに、東京の国際化、機能集中が進んだことによって、まちの風景は大きく変化しました。

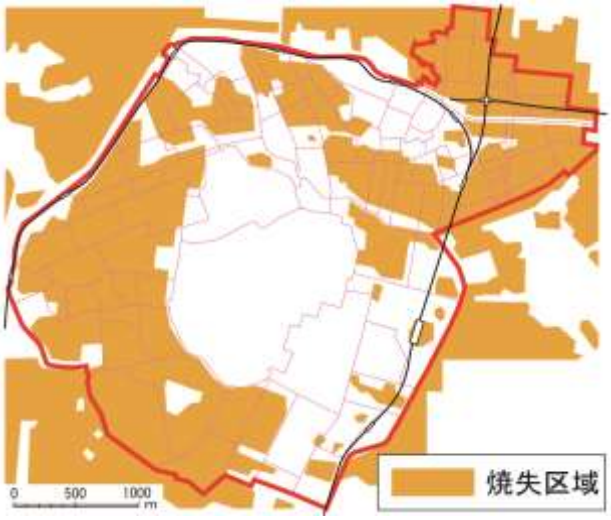
▼震災・戦災からの復興

関東大震災と震災復興

震災による焼失区域

・飯田橋～神田の焼失区域などにおいて大規模な震災復興区画整理事業*
⇒面整備と街路の拡幅、公園の整備、小学校や橋梁等の公共施設の不燃化などで現在の街区が形成

東京大空襲と戦災復興



空襲による焼失区域

・電気製品のヤミ市の成立
（神田小川町～神田須田町、現在の秋葉原電気街）
・印刷出版業の復活
（戦前の「本の街」としての神田の姿）

出典：千代田の土地利用

（４）昭和後期～平成：急激な業務地化・人口減少とそこからの回復、都市再生の進展

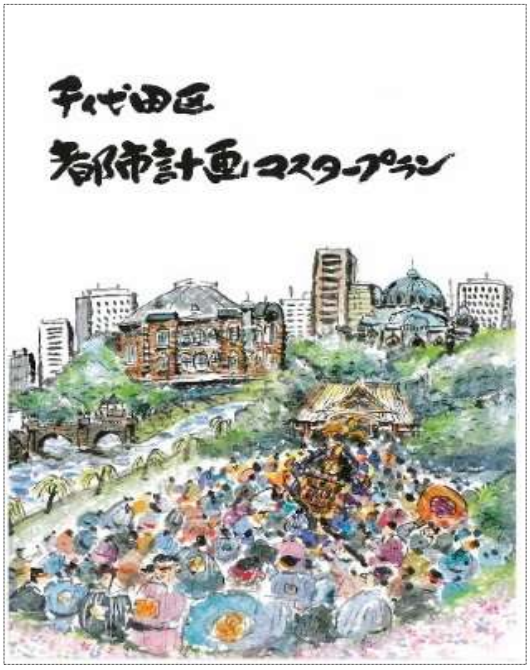
昭和の終わり頃から平成の初期にかけては、急激な地価高騰や業務地化により、定住人口*の減少が急速に進行し、定住人口*が３万人台になるなど、自治体存続の危機に陥りました。

この頃、千代田区では、居住機能の回復を目指した千代田区街づくり方針*や千代田区都市計画マスタープランを定めて様々なまちづくりの取組みを進めました。

平成 14（2002）年の都市再生特別措置法*の制定を契機に各地で都市再生を目的とした大規模な再開発事業が進みました。また、住宅供給やオープンスペース*の確保にとどまらず、風格ある街並みや歴史的資源を活かした建築・空間デザイン、公共施設整備、環境・エネルギー対策、災害対応をはじめ、まちの課題解決や価値創造に資する多様な機能や空間、施設が充実しました。

その間、定住人口*は回復基調に転じ、平成 25（2013）年には、平成 4（1992）年に区の基本構想で目標に掲げた定住人口* 5 万人に到達しました。

▼千代田区都市計画マスタープラン
〔平成 10（1998）年３月策定〕



▼年表

▶江戸期のまちの始まり	
徳川氏の江戸入城　（1590 年） 江戸城修築開始　　（1592 年）	江戸城下市街整備のため、本町通りの絵図作成を命じ、町割り*に着手 鎌倉河岸への材木・石材の集積、道三堀の開削（沿岸に町地が成立） 江戸城の掘り揚土による日比谷入江の埋め立て 西の丸（新城・御隠居城）工事着手
徳川家康が征夷大将軍に任命 江戸開府　（1603 年）	神田・日本橋・京橋の町割り*が決まる 豊島洲崎（江戸前島）埋め立て工事、 江戸下町の建設が始まる（諸大名の普請役）
江戸城建設(1604 年) (1606 年) (1607 年) (1610 年) (1612～1636 年ごろ)	江戸城修築発令 江戸城増築が始まる（西国諸大名の普請役）、江戸城本丸落成 江戸城天守閣及び石垣を修築（諸大名の普請役） 江戸城西の丸普請が始まる（関東大名） 大名小路、天守台が整備、神田台の掘り割り（駿河台・御茶ノ水）、外濠（赤坂～飯田橋）の整備が進行 ※この頃には、平川などの河川改修と同時期に形成された内濠や、牛ヶ淵、千鳥ヶ淵、神田山を切り崩して整備された神田川などが見られる
江戸城完成（1639 年）	江戸城の総構えが完成

日比谷入江の埋め立て前
（1580 年ごろ）

江戸城の建設が始まった頃
（1606～1607 年ごろ）

江戸城の総構えが完成する頃
（1612～1636 年ごろ）

▶近代国家の首都として必要な社会基盤の整備と都市機能・人の集積	
明治初期～中期	官庁集中計画 東京市区改正条例 （公共公益施設・都心部の道路・上水道の導入、日比谷公園の整備など） 鉄道施設・路面電車の整備、東京大学など高等教育機関の発祥
明治後期	丸の内などのオフィス街の形成 軍用地の民間払い下げ（丸の内～日比谷一帯・神田三崎町）
▶首都東京の玄関、顔づくり	
大正 3（1914）年	東京駅の創建・開業、上野－新橋間鉄道開設
▶震災・戦災からの二度の復興	
大正 12（1923）年～	関東大震災と震災復興
昭和 20（1945）年～	東京大空襲と戦災復興
昭和 22（1947）年	特別区再編成（麹町区と神田区が合併し、現在の千代田区へ）
▶高度経済成長と国際化、東京への機能集中	
昭和 39（1964）年 （東京オリンピック開催） 前後	首都高速道路の整備、道路の拡幅、濠の埋め立て 路面電車の廃止（昭和 42 年～） 業務都市として世界の中で東京の地位が向上、東京への人・モノ・カネ・情報の集中 国際化の進展

▶急速に進む業務地化と定住人口減少、定住人口回復に向けたチャレンジの始まり	
昭和 59（1984）年～	**市街地再開発事業*の始まり** ・飯田橋地区（昭和 59 年完了）～
昭和 62（1987）年	**千代田区街づくり方針*策定** （定住人口*の回復、区民生活と都市機能の調和）
平成 4（1992）年	**新基本構想策定** （21 世紀初頭の目標：定住人口* 5 万人など）
	住宅付置制度*の導入
平成 9（1997）年～	**千代田区型地区計画*の適用開始**：神田和泉町地区 （個別建替えの促進・都心居住機能の回復）
平成 10（1998）年	**千代田区都市計画マスタープラン策定**
	丸の内における都心機能の更新・複合化の始まり ・丸の内二丁目特定街区*（平成 10 年決定）
平成 11（1999）年	**過去最少の定住人口*（4 万人を下回る）** ※平成 11 年 4 月に過去最小の 39,264 人を記録
平成 13（2001）年	**千代田区第三次基本構想*策定（～平成 36 年度）**
▶都心回帰・定住人口回復基調への転換、本格的な都市再生の進展	
平成 14（2002）年	**都市再生特別措置法*制定**
	都市再生緊急整備地域*の公布・区域指定 ・秋葉原・神田地域 ・東京駅・有楽町駅周辺地域
	特例容積率適用地区*指定 ・大手町・丸の内・有楽町地区
	エリアマネジメント*の始まり ・NPO 法人大丸有エリアマネジメント協会設立
平成 15（2003）年	**千代田区まちづくりグランドデザイン策定**
平成 15（2003）年～	**大手町連鎖型都市再生プロジェクト*（第 5 次指定）** ・都市再生特別地区* ・土地区画整理事業*（連鎖型都市再生／平成 17 年決定） ・市街地再開発事業*（個人施行）
	市街地再開発事業*などによる住宅供給の本格化 ・神保町一丁目南部地区（平成 15 年完了）
平成 17（2005）年～	**都市再生特別地区*の指定による機能更新の本格化** （オープンスペース*確保、公共施設整備、環境・エネルギー対策、災害対応、 風格ある街並みや歴史的資源を活かした建築・空間デザインなどの進展） ・丸の内 1-1 地区（平成 17 年決定）
平成 23（2011）年～	**秋葉原駅周辺の新拠点形成** ・土地区画整理事業*（平成 23 年換地処分）、総合設計制度*
平成 24（2012）年～	**特定都市再生緊急整備地域*の区域指定・統合（東京都心・臨海地域）**
平成 25（2013）年	**国家戦略総合特区*指定（東京都ヘッドクォーター特区指定）** ・大手町・丸の内・有楽町地区
▶定住人口 5 万人回復	
平成 25（2013）年	**定住人口* 5 万人に回復**
平成 28（2016）年	**開発事業に係る住環境整備推進制度*スタート**（住宅付置制度*からの移行）
平成 29（2017）年	**定住人口* 6 万人に回復（外国人含む）**

2　千代田区の魅力・価値

千代田区では、江戸開府から約 400 年、更に首都東京の都心として約 150 年の歴史を重ねる中で、江戸城の城郭を基本とした都市の骨格構造と都心の風格、心地よい環境を継承してきました。

また、都心への近接性・利便性を活かした居住回復のためのまちづくりとともに、様々な遺産を活かし、界隈*の個性や街並み、文化を醸成してきました。そして、多様で創造的な都市活動が活発に展開され、持続可能な未来につながる変革を重ねながら、世界に愛される都心ならではの魅力・価値の創造のために先駆的なチャレンジをしています。

魅力価値 1　首都東京の風格・文化と創造性・活力が調和している

◇江戸開府以来 400 年にわたって日本の政治・経済・文化の中心であり続ける都心の風格・品格と江戸を起源とする文化の蓄積
◇首都東京を牽引する国際ビジネス交流、文化芸術、教育など、経済活動や文化交流活動に代表される高度な都市機能の集積
◇国内外から多くの人が集積し、クリエイティブな次世代の魅力・価値を創造するつながり
◇都心生活を豊かにする活発な活動

魅力価値 2　利便性が高く、豊かな都心環境に恵まれている

◇都心でも特に高度な移動ネットワーク
◇皇居を中心に緑と水辺に彩られた都心のアメニティ*や生物多様性*
◇公共空間やオープンスペース*を活かした多様で豊富な居心地のよい空間
◇都心への近接性・利便性と豊かな都心環境に恵まれた落ち着きある居住環境

魅力価値 3　環境、災害対応面等で先駆的なチャレンジが展開されている

◇建築物の低炭素化、省エネルギー対策、まちづくりと連携した面的エネルギー*利用などの先駆的な環境都市づくりの取組み
◇災害時の首都機能や国際ビジネス交流の中枢機能の強靭性・継続性を高める拠点機能
◇技術革新に対応する社会実験などの活発な活動

魅力価値4

都心千代田ならではの多様性のある界隈が息づいている

◇江戸からのまちの成り立ちを背景に、地域それぞれの個性が色濃く表れている一帯
◇それぞれのまちの文脈の中で育まれてきた多様な文化やまちの味わい
◇都心の高度な機能の集積や、下町の生業、暮らしのつながり

①落ち着いた住宅地

②古書店街

③学生街

④医療機関の集積地

⑤老舗の集積地

⑥秋葉原電気街

⑦国際的なビジネス交流ゾーン

⑧文化・芸術街

⑨一団地の官公庁施設

3　まちづくりの成果

千代田区では、バブル期からの急激な地価高騰と業務地化により、人口が急減、平成 12（2000）年には３万人台となる中で、平成 10（1998）年に千代田区都市計画マスタープラン、平成 15（2003）年には千代田区まちづくりグランドデザインを策定し、地域それぞれの特性に応じた建築・開発の誘導、住機能の回復に向けた施策などを展開してきました。

（１）まちづくりを先導してきた主な取組み

◇地域に応じたきめ細かな地区計画*の導入

江戸から現代まで受け継がれてきた遺産や界隈*の個性を継承しつつ、秋葉原駅周辺や飯田橋駅周辺では、区全体を見渡した視点での拠点整備や建築・開発の相互連携が進展しました。

一方で、麹町・番町地域や神田一帯、大手町・丸の内・有楽町地域などでは、地区特性に応じた街並みや市街地環境の維持・形成、住宅床の確保等を適正に誘導するため、個別建築物の建替えのルール（一般型地区計画*、千代田区型地区計画*等）をきめ細かく定めるまちづくりを展開してきました。

◇住宅付置制度*の運用

「住宅付置制度*」の運用がスタートしたことにより、再開発などと連動した良好な住宅の供給と住環境の整備が進展しました。

◇計画的な大規模開発の誘導と都心再生

大手町・丸の内・有楽町地域や秋葉原駅周辺、飯田橋駅周辺では、平成 14（2002）年の都市再生特別措置法*制定の時期の前後から、都市開発諸制度*や都市再生特別地区*等を活用した開発が活発化しました。

▼千代田区まちづくりグランドデザイン（まちの機能と骨格のデザイン【展開マップ】）　平成 15（2003）年 5 月策定

都市再生の動きが活発する中で、個別に計画・実施中であった都市開発を俯瞰した全体像を完成予想図とともにまとめ、事業間の相互連携や周辺への波及などによって、事業効果を区全体のまちづくりに広げるイメージを示しました。

▼千代田区におけるまちづくりの展開

※この地図は、東京都知事の承認を受けて、東京都縮尺 2,500 分の 1 の地形図を利用して作成したものである。（承認番号）２都市基交著第 147 号

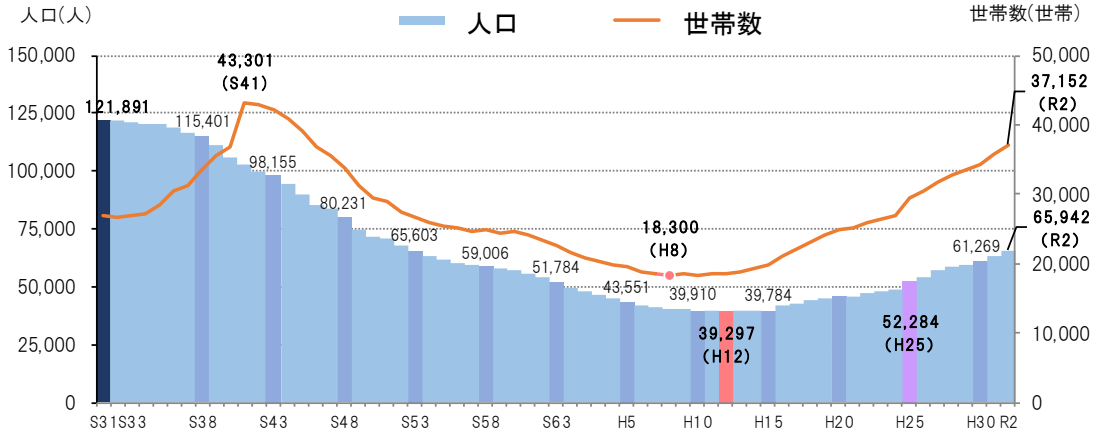
（2）まちづくりの主な成果

定住人口の回復と都心の高度な機能集積、都市再生の進展

◇居住機能の確保による定住人口*の回復

住宅付置制度*導入後、平成 30（2018）年まで約 7,000戸のファミリー向け住宅を創出し、平成 25（2013）年には定住人口*が 5 万人に回復、平成 29（2017）年 4月には外国人を含めて 6 万人に至りました。

▼千代田区の人口・世帯数の変化



資料：千代田区史、住民基本台帳統計資料（各年 1 月 1 日現在）
（注）昭和 24～27 年の数値は、食糧管理法に基づく「食糧配給台帳の登録等に関する規則」により登録された人口、昭和 28～42 年の数値は住民登録人口、平成 25 年より数値に外国人住民を含む

◇鉄道駅及び周辺の整備の進展

東京駅や秋葉原駅、飯田橋駅、御茶ノ水駅など、駅・駅舎の改修とともに、周辺の開発と連動して都市基盤整備や、地上・地下のネットワーク形成、歴史的資源を活用した空間デザインなどが進んでいます。

◇国際的な中枢業務拠点の再生と都心機能の多様化

都市再生が進展した大手町・丸の内・有楽町地域などでは、業務機能の更新・高度化にとどまらず、都市基盤の整備や防災・環境性能の向上が進みました。また、商業施設や文化交流活動の充実など、都心を豊かにする都市機能の複合化や多様な空間の創出が進み、休日や夜間も含め、多種多様な楽しみ方でまちが賑わうようになりました。

◇開発と連動した防災性の向上と環境・エネルギーなどの都市基盤の充実

耐震化や防災備蓄倉庫の整備が進みました。また、一次エネルギーの消費削減を促す環境配慮型の建築誘導、地域冷暖房*やコジェネレーションシステム*等による面的エネルギー*利用などが進んでいます。

◇千代田区から発信する社会実験やエリアマネジメント*の発展

大手町・丸の内・有楽町地域や秋葉原駅周辺、日比谷駅周辺など、都心の豊かな空間や環境を活かして、公共空間や民間のオープンスペース*等を効果的に活用した先端的で実験的な取組みが活発化しており、都心の魅力・価値の創造と発信を先導しています。

4　計画改定の視点と進化の方向性

まちや都心生活の「質」（＝QOL：Quality Of Life）の向上につなげる

千代田区では、約 20 年間の間に定住人口* 5 万人回復を達成し、まちづくりの課題は変化しています。また、これからの 20 年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を経験した人々の意識の変化やＩＣＴ*の高度化などを背景に、社会・都市の変革（イノベーション*）への取組みが加速していくと予想されています。今後は、社会や都市で起こる大小様々な変革の中で、感染症拡大を含む都市のリスクへの適切な対応と都心の価値ある経済・社会活動を両立させ、人々が享受するまちや都心生活の「質」（QOL*）の向上につなげていくことが求められています。

本計画では、歴史に培われた都心の魅力と多様性や、都市の持つ集積のメリットを活かしながら、集積のデメリットにも対応するなど、以下の３つの視点を重視してまちづくりを進化させていきます。

そして、次世代の人々、世界の人々から選ばれる都心の価値を創造し、首都東京のフロントランナー*として新しい時代を牽引していきます。

視点 1　“人”が主役のまちづくり

都心に住む人、活動する人の多様性が増す中で、誰もが心地よい居場所や様々な交通モード*が切れ目なくつながる移動しやすい環境の充実、歩行者・自転車等を優先した歩きやすい道路空間への再編など、“人”を主役とした都心生活の豊かさを高めていく視点が重要になっています。

視点 2　豊かな都心生活の継承・創造

どれだけ定住人口*を回復させるかという、住宅床・戸数などの量的確保を重視した開発誘導の考え方を転換し、これまでに培ってきた千代田区の多様な魅力・価値を活かしながら、住み、働き、活動する時間をより豊かにしていく視点を重視していくことが重要です。

視点 3　加速する社会の変革を支えるまちづくり

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を経験して生まれた新しい常識（＝ニューノーマル）の浸透やＩＣＴ*の高度化などにより、都心の住まい方や働き方、ビジネス、観光・交流のスタイルの変化が加速してきています。こうした背景の中で、都心に集まる人の「知」の交流を通じて、様々な分野のビジネス・サービス等のイノベーション*が生まれ、育つよう、土地利用、移動環境、公共空間の活用などのまちづくりの面から、社会の変革と様々な都心の創造的活動を支えていく視点が重要です。

〔まちづくりの進化（４つの方向性）〕

計画改定の３つの視点に基づいて、従来のまちづくり分野を４つの進化の方向性から見直し、都心千代田の魅力・価値の継承と次世代の新たな価値創造を牽引するまちづくりを展開していきます。

計画改定の３つの視点

- **視点１　“人”が主役のまちづくり**
- **視点２　豊かな都心生活の継承・創造**
- **視点３　加速する社会の変革を支えるまちづくり**

従来のまちづくり分野	４つの進化の方向性	これからのまちづくりの展開
土地利用	建築・開発の規制・誘導の進化	【第２章】まちづくり（土地利用）の基本方針：**都市・まち・エリアのトータルなデザイン**
住宅・住環境整備	都心千代田ならではの魅力の進化	【第３章】テーマ別まちづくりの方針 **テーマ①：豊かな都心生活と住環境を守り、育てるまちづくり**〔未来へのまなざし〕次世代の魅力ある「都心生活」
緑と水辺の整備	都心千代田ならではの魅力の進化	**テーマ②：緑と水辺がつなぐ良質な空間をつくり、活かすまちづくり**〔未来へのまなざし〕居心地のよい空間の多様性
景観づくり	都心千代田ならではの魅力の進化	**テーマ③：都心の風格と景観、界隈の魅力を継承・創出するまちづくり**〔未来へのまなざし〕都心の風格とまちの文脈がつなぐ界隈
道路・交通体系整備	世界都心を支える高度で強靭な社会基盤の進化	**テーマ④：道路・交通体系と快適な移動環境がつながるまちづくり**〔未来へのまなざし〕駅・まち・みち一体の次世代交通
福祉のまちづくり	世界都心を支える高度で強靭な社会基盤の進化	**テーマ⑤：多様性を活かすユニバーサルなまちづくり**〔未来へのまなざし〕障壁のない多様な活動と交流
防災まちづくり	世界都心を支える高度で強靭な社会基盤の進化	**テーマ⑥：災害にしなやかに対応し、回復力の高い強靭なまちづくり**〔未来へのまなざし〕災害対応力(防災力・復元力・継続性)
環境と調和したまちづくり	世界都心を支える高度で強靭な社会基盤の進化	**テーマ⑦：高水準の環境・エネルギー対策を進めるまちづくり**〔未来へのまなざし〕都心の快適性と脱炭素、エネルギー利用
まちづくりの実現	まちづくりのエンジンの進化	【第５章】将来像の実現に向けた都市マネジメントの方針：**都心の力を創造的に活かす協働のまちづくり** **地域まちづくりの推進** **まちづくりの継続的な改善・進化** **まちづくりの具体化と更なる進化に向けて**

〔テーマの境目のない取組み〕まちづくりの効果的な連携と相互補完

【第４章】地域別まちづくりの方針

コラム　多様性の中で価値を共有し、ＱＯＬを高める

「QOL*（Quality Of Life）」は、もともと医療・福祉分野で着目された観点ですが、近年、自分への褒美や評価を「QOL アップ」と表するように個々の生活の満足感や生きがいを表す概念として馴染みつつあります。

一方、まちづくりは、多種多様な人々が集まり出会う都市において、個々の要望・要求の衝突を予防し、交通整理する役割を果たしてきましたが、これからは複雑に多様化した価値観に基づく各々の QOL*の向上を、人々ができる限り自由に図れるように下支えする仕組みを提供し、個々の「コト」をサポートする「モノ」を整える役割が、より重視されることになると考えられます。

特に公共スペースやコモンスペースがもたらす余白や距離感・調整余地には、多様な価値観・個性を認識しあうきっかけや、小さな共通項を丁寧に拾い出し、調整を図る機会を継続的に拡張する場として、今まで以上に活用の可能性と工夫が期待されます。そうした場で異なる価値観や要求が共存できる状態・関係（すみ分け、使い分け、多様な選択肢）が形成されることが QOL*の向上につながっていきます。

また、単独では得られない豊かさ、集まるからこそ獲得できる豊かさや、人々が思いがけず出会ったり、他者と刺激しあったりすることから生まれる豊かさは、都市の最も根源的な魅力であり、活力です。個人の独立性を尊重することと同時に、こうしたひとが集まる場としての魅力を育てる意識も忘れてはなりません。

そうした意識を重ねていくことが、地域ごとの独自の魅力につながり、まちの質・活力を上げるとともに、個々の QOL*向上を支える豊かな下地となるはずです。

～　複雑に多様化した価値観　～

コラム　「アジャイルな柔軟さ」を追求するグリーンインフラ

グリーンインフラ*は、公園や緑地、河川等が持つ環境保全、防災、地域振興等の機能に着目したインフラ*の保全整備をさすと理解されてきました。「グリーン＝緑・水・生態系」という解釈です。しかし、昨今「グリーン」は、環境保全全般をさすと理解されています。新型コロナウイルス感染症の感染拡大からの復興に際し、気候変動対策等を積極的に推進する施策を「グリーン・リカバリー」と称するのは、この解釈に基づきます。よって、グリーンインフラ*を水・生態系に限定せず、鉄やコンクリートで造られる「グレーインフラ」であっても、環境保全の技術や施策を積極的に取り込む場合には、グリーンインフラ*に含まれるという考え方もあります。

しかし、もう一歩、グリーンインフラ*の本質を考える必要があるのではないでしょうか。グレーインフラは、計画や設計図に基づき竣工し、最良の初期状態を維持すべくメンテナンスし、一定以上に老朽化が進むと取り壊されます。時間軸の中で「計画・設計→建設→竣工→メンテナンス→廃棄」と進行します。それに対して、例えば日本庭園はどうでしょうか。一定の設計のもとに作庭されますが、初期状態は必ずしも最良ではありません。木々の成長や樹形の変化、枯死など、時間軸のなかの「変化」を受け止めつつ、庭園全体としてのバランスを図りながら、その時々の姿を整えようとします。完成形としての竣工と、初期状態維持のためのメンテナンスといった区分けがなく、変化を前提に、不断に作り続けられるのが日本庭園です。

グレーが固定的な目標設定とその長期的維持を基調とする「予定調和的な堅固さ」を求めるのに対し、グリーンは変動する様態を受容し、その時々の状況に即応した調和を目指す「アジャイルな柔軟さ」を求めます。グリーンインフラ*の本質は、この発想にあるのではないでしょうか。システム開発に喩えるなら、グレーインフラがウォーターフォール型、グリーンインフラ*がアジャイル型であり、集合住宅建設になぞらえるなら、前者がスケルトン、後者がインフィルとなります。

今後我が国は、感染症の蔓延のみならず、気候変動や地震など予期せぬ激甚災害に襲われることが危惧されています。社会資本整備についても、これまでのような「予定調和的な堅固さ」だけでは、こうした災害に十分に対応することは困難でしょう。ダメージを受けても速やかに復旧・復興し得るレジリエンスが求められる時代にあって、「アジャイルな柔軟さ」を旨とするグリーンな発想にもとづく社会資本整備は、これからの日本の都市や社会のあり方を考える鍵のひとつとなるでしょう。